

『四匹の猫』と『クアトラ・ガッツ』

《キーワード》モデルニズム バルセロナ

孝岡睦子

はじめに

一八八八年五月二十日、バルセロナで初の万国博覧会が幕を開ける。¹これはバルセロナを中心にカタルーニヤ地方が、一八七〇年代から八十年代前半にかけてワイン市場の好景気、繊維・金属工業などの発達による経済成長と中世以来のカタルーニヤ固有のアイデンティティーと文化の復興をめざす思想・文学運動「ラナシエンサ」に由来する実を国内外へ表明するものでもあった。この博覧会は多くの成功をおさめたとは言いがたいにせよ、カタルーニヤ地方にその文化や科学技術の水準をヨーロッパ諸国の文脈で評価を許すという歴史的機会をもたらしたのである。²また同時に、この機会はカタルーニヤ文化が別の段階へと移行する場を提供することとなった。それが「モデルニズム（ムダルニスマ）」である。

バルセロナ万博ではシウタデリヤ公園にあたる場所を会場とし

て、リュイス・ドゥメナク・イ・ムンタネー (Lluís Domènech i Montaner, 1850-1923) の建築を代表とし、こと美術館や凱旋門建設など公共建築事業に多くの力が注がれた。このことからわかるよう、一八八八年の万博は、まず建築、装飾芸術の領域においてモデルニズム体験を生み出すものであったのである。モデルニズムを簡略に定義すれば、³それは十九世紀末から二十世紀初頭にかけての特にカタルーニヤ地方における文化現象であり、フランスのアール・ヌーヴォー、ドイツのユーゲントシュティールやイギリスのモダン・スタイルなどから影響を受け、建築や装飾芸術にとどまらず、絵画、彫刻、グラフィック・アート、そして文学、演劇や音楽といった様々なジャンルに広がり持った芸術運動といえる。ただこの動向は、諸外国から最新の文化的気運を受け、従来の体制に対する不信や反発から生まれた「新しさ」への働きかけのみからではなくより複雑な姿を見せる。諸外国との積極的な接触という国際主義を進めると同時に、ラナシエンサの、

その保守性は否定するものの、中世回帰の性格を受け継ぎ、かつ同時代のカタルーニャ主義の高まりと連動する動きでもあった。つまりモデルニズムは、スペイン国内での地方文化に対する抑圧に対抗しながら自分たちカタルーニャの文化を見つめなおし、それを近代化するヨーロッパ文化の文脈に組み込んでゆこうとする試みでもあった。言い換えれば、スペイン国外との積極的な交流と同時にカタルーニャ人としての民族固有のアイデンティティーの模索という、外へと内へと一見相反する流れが接し合い衝突する場を舞台とした思想的・政治的流れを含む芸術運動であったといえよう。

本稿ではモデルニズムについて言及してゆくうえで、その中心場となったバルセロナの居酒屋「四匹の猫」(アルス・クアトラ・ガッツ)の活動に視点を置く。そして中でも特にそこで発行された文芸誌『クアトラ・ガッツ(四匹の猫)』を紹介してゆくことに意識を注ぎ、最後にモデルニスタたちが自分たちの運動モデルニズムをどのようなネットワークを形成しながら展開していったのかという点についても触れてゆきたい。

一、居酒屋「四匹の猫」へ

一八八八年のバルセロナ万博が、主に建築、装飾芸術におけるモデルニズムの表明の場であるとしたら、一方、モデルニズム絵画に高い関心が向けられる機会はさらに二年を待たねばならなかった。その機会とは一八九〇年十月十六日より開催されたサラ・

パレスでのサンティアゴ・ルシニョール(Santiago Rusiñol, 1861-1931)・ラモン・カザス(Ramon Casas, 1866-1932)そして彫刻家アンリク・クララソ(Enric Clarasó, 1857-1941)による最初のグループ展である。⁽⁴⁾この展覧会において彼らはフランスの首都パリでの実体験にもとづき、例えばルシニョールの《モンマルトルのカフェ》(図1)のような印象派、エドガー・ドガ(Edgar Degas, 1834-1917)そしてジェームズ・ホイットスラー(James Whistler, 1834-1903)などから影響を受けた近作を発表し、⁽⁵⁾バルセロナの芸術家や批評家たちの間に物議を醸したのである。ルシニョールたちがこぞってパリを訪れたように、⁽⁶⁾モデルニスタにとって最新の芸術は、スペインの首都マドリドよりもむしろピレネー山脈の向こう側、とりわけ当時の芸術の中心地パリにあった。⁽⁷⁾パリを体験した彼らは、そこで吸収したものをカタルーニャに報告、あるいは実際に持ち帰ることによってヨーロッパ最新の芸術動向を故郷に伝播したのである。この側面からとらえれば、モデルニスタはパリを主としてピレネー山脈の北側の文化を直接体験した者、あるいは間接的にでも強く吸収しようとした者ともいえよう。

そのようなモデルニスタたちの中でもとりわけルシニョールとカザスは中心的な存在であった。なかでもルシニョールによる計五回にわたった「モデルニズムの祭典(フェスタ・ムダルニスタ)」は、モデルニズムをある程度の規模で包括的にまとめた最初期の出来事として特筆すべきものであろう。ルシニョールは、一八九一年十月、すでにルミニスタを魅了していたバルセロナの近郊に

ある海辺の町シッジャスを訪れ、そこで翌年八月に第一回目のモデルニズムの祭典として展覧会を開催した。そこにはエリゼウ・メイフレン (Eliseu Meifrén, 1859-1940) などのルミニスタを含む同時代の画家たちによる百点近くの作品が展覧され、シッジャスに初期モデルニズムを集中させるきっかけを作ったのである。⁽⁸⁾ さらに一八九三年、ルシニョールはシッジャスのサン・ジュアン地区にある漁師の家を購入し、そこを改築して自宅兼アトリエを設けている。この建物「カウ・ファラット」の竣工式を兼ねて同年秋に開催されたのが第二回目の祭典であった。⁽⁹⁾ 九月十日に行われたこの祭典では、アンリク・モレラ (Enric Morera, 1865-1942) とフランス人作曲家バンジャマン・ゴダール (Benjamin Godard, 1849-95) やベルギー人作曲家セザール・フランク (César Franck, 1822-90) による音楽コンサート、そしてカタールニヤ主義を掲げる『ラベンス (進歩)』誌の主催でベルギー人モリス・メーテルリンク (Maurice Maeterlinck, 1862-1949) の象徴主義的作品『闖入者』(一八九〇年) が上演されている。これはカタールニヤ語に翻訳された台本を用いてルシニョールが演出を手がけたもので、スペイン国内における初の上演となるものであった。⁽¹⁰⁾

さらにルシニョールは独自で蒐集していたコレクションを収めるためにカウ・ファラットを拡張し (図2 A・B)、⁽¹¹⁾ 一八九四年十一月四日、その公的な竣工式とともに第三回目の祭典を行っている。これはシッジャスおよびカウ・ファラットを初期モデルニズムのメッカとたらしめる重要な祭典となった。なぜならば、モデ

ルニスタによって熱狂的に信奉されていたエル・グレコ (El Greco, 1541-1614) の油彩画二点《悔悛するマグダラのマリア》(一五八五―九十年、カウ・ファラット美術館) と《悔悛する聖ペテロ》(一五九五―一六一四年、カウ・ファラット美術館) の到着祝い兼ねてのものでもあったからである。⁽¹²⁾ シッジャスの駅に到着した絵画をカウ・ファラットまで運ぶために、バルセロナから詰めかけたモデルニスタたちと町の人々によって祝福の行進が行われた (図3)。⁽¹³⁾ それは馬に乗りカウ・ファラットの旗を掲げたペラ・ロメウ (Pere Romeu, 1862-1908) とリュイス・ラバルタ (Lluís Labarta, 1852-1924) の後ろからカザス、クララソ、メイフレン、ラモン・ピチョット (Ramon Pichot, 1871-1952)、リュイス・ペリイセー (Lluís Pellicer, 1842-1901)、フランセスク・ソレー・イ・ルビロザ (Francesc Soler i Rovirosa, 1836-1900) らにそれぞれの御輿で運ばれるエル・グレコの作品が続き、最後をルシニョールとその友人たちが締めるという行列であった。また、同日の午後にはカウ・ファラットにて詩会「花の宴」が開催され、⁽¹⁴⁾ ジュアン・マラガイ (Joan Maragall, 1860-1911) などその会の勝者たちによる作品は、後に一冊の詩集としてルシニョールの演説原稿とともに『ラベンス』誌から発行されている。⁽¹⁵⁾ さらに約三年後の一八九七年二月十四日に行われた第四回目の祭典では、オペラ『妖精物語』(一八九六年) の初演が行われている。⁽¹⁶⁾ この催しは千人近い観客を動員し、脚本はジャウマ・マッソ・イ・トランドス (Jaume Massó i Torrents, 1863-1943)、作曲はモレラ、舞台デザインはアレクサンドラ・ダ・リケー (Alexandre de Riquer,

1856-1920)、衣裳はラバルタ、そして宣伝ポスター(図4)はミケル・ウトリリヨ(Miguel Utrillo, 1862-194)が手がけたものであった。このようにルシニヨールはシッジヤス、そしてカウ・ファラットにて自らが指揮をとり、美術展覧会のみならず詩会や芝居、コンサートなどさまざまな芸術活動を企画・実行し、それらをひとつの場所に集中させることで、モデルニズムをひとつ運動にまで高めさらに活性化させていったのである。だが一方で最後となる第五回目の祭典は一八九九年七月に行われるのだが、第四回目の祭典以後、モデルニズムの拠点はルシニヨールとともにシッジヤスのカウ・ファラットから次第にバルセロナの居酒屋「四匹の猫」へと移ってゆくのである。

二、居酒屋「四匹の猫」

ビアホール、カフェそしてレストランとして(図5)、一八九七年六月十二日、バルセロナ旧市街にあるモンテシオ通りに「四匹の猫」は開店した。それは、モデルニズムの建築家ジュゼップ・プッチ・イ・カダファルク(Josep Puig i Cadafalch, 1867-1956)による初期の建築物カザ・マルティを活用したものである。画家としての経歴を持つ「四匹の猫」の主人ペラ・ロメウは、自身のパリでの経験から特にモンマルトルのキャバレー「黒猫(シヤ・ノワール)」をモデルとし、そのバルセロナ版をモンテシオ通りにもたらすことを試みたのであった。¹⁹⁾そしてその成立はパリでロメウとともに過ごしたこともあったウトリリヨの提案、そして

ルシニヨールとカザスの支援によるところが大きく、店名は創設に携ったこれら四人の数を暗示している。²⁰⁾また「黒猫」のように、「四匹の猫」は飲食を提供する場としてよりも、むしろ芸術家たち、特にモデルニスタの交流の場やその作品を発表する場であることに重きを置くものであった。そのネオ・ゴシック様式の建物内部は大きく二室に分かれており、入り口に近い小部屋はいくつかのテーブルが用意され、ルシニヨール、カザスそしてウトリリヨを中心にしばしば最新の流行や芸術談義に花を咲かせるタルトゥリアが行われた。一方、奥のより大きな部屋は定期的に影芝居、人形劇、コンサート、詩の朗読そして展覧会などの会場として使用されたのである【表1】。²¹⁾このような「四匹の猫」で練り広げられるタルトゥリアやその他の催しには国内のモデルニスタが集まっただけではなく、国外からバルセロナを訪れた芸術家たちにも足を向けさせ、そこはまさに最新の流行を吸収し発信する場所となっていたのである。

一方、室内装飾に目を向ければ、もっとも目をひくのが奥の部屋左手の壁面に掲げられたカザスによる大型の作品《二人乗り用自転車に乗るラモン・カザスとペラ・ロメウ》(図6)であろう。明確な輪郭線と形態の単純化によってモンジュイックの丘を背景に、当時の流行であった自転車に乗るモデルニスタたち、前にはカザス自身が後ろには絵の前に立つ者をはっきりと見据える姿勢でロメウが描かれており、この作品は造形的にもまた主題においても極めてモデルニズムを体現しているといえよう。後にこの絵はカザスによる別の作品と置き換えられている(図7A・B、図

8 A・B)。その作品は先の絵(図6)と同じ様式で同じ人物たちが自動車に乗っている様子を表わしたものであるが、先の作品(図6)との置き換えは後者の作品がより最新の流行を表わすと考えられたゆえであると指摘されている²²⁾。室内にはその他にカタルーニャ地方の伝統的な装飾タイル、陶磁器や鉄製品などが多数飾られるとともに、多くのモデルニスタによる小品デッサン、とりわけ「四匹の猫」に馴染みの者たちによる仲間の肖像や店内の様子を描いたものが所狭しと掛けられていた(図7 A・B、図8 A・B)。このような室内空間のアレンジはルシニョールによるカウ・ファラットのそれ(図2 A)、様々な民芸品や工芸品と自作も含めてモデルニズムの画家たちの作品などをひとつの空間に溶け込ませるといふ点で共通点がみとめられる。ただ「四匹の猫」の室内空間の場合、そのカタルーニャの旗に寄り添う四匹の猫という図柄のエンブレムも暗示するように、モデルニズムの文脈において何よりもこの場がカタルーニャの文化圏に存在するということへの意識がより強く感じとれるだろう。

また店内を仲間たちの作品とその肖像で飾る目的には、もうひとつの理由が考えられる。そのことについて言及する前にここで少し「四匹の猫」で催された様々な活動の中のひとつであるモデルニスタの展覧会に注目してみたい。最初の展覧会は、開店から約一ヶ月後の一八九七年七月十一日から十八日にかけて行われたグループ展であった。その出品者はリュイス・ボンニン(Lluís Bonnin, 1873-1964)、リカルド・カナルス(Ricard Canals, 1876-1931)、カザス、アスペルト(Espert)、ジュアキン・ミル(Joaquim Mir, 1873-

1940)、イジドラ・ノネイ(Isidre Nonell, 1873-1911)、ピチョット、ウトリリヨ、アベリ・トゥレン(Eveli Torent, 1876-1940)そしてルシニョールであり、合計六十四点の作品が展覧された。本展のためには、『ラベンス』誌によって作品目録(図9)が制作されており、²³⁾それからもわかるようカザス、ルシニョールそしてウトリリヨといったモデルニズムの中核による作品数の多さが目立つが、彼らに影響を受けたより若い世代ボンニン、カナルス、ミル、ノネイ、ピチョットといった画家たちにとって、この「四匹の猫」でのグループ展そして続く個展は公的に作品を発表できる貴重な機会となったのである。

さらにこのような若い世代に対して、「四匹の猫」は彼らが活躍する場や、作品がより多くの目に触れられる機会を設けてゆく。それは例えば店内に彼らの作品を飾ることや個展の開催であり、そして店と同名の文芸誌『クアトラ・ガッツ』の創刊である。モデルニズムはポスター、本の装丁、蔵書票そして豊富な挿絵入りの雑誌類といったグラフィック・アートの領域に活性化をもたらす動きでもあった。²⁴⁾グラフィック・デザインが持つ見る者に訴える力そしてメディアの持つ効果を見逃すことなく、「四匹の猫」でもカザスによるものをはじめとしてすぐれたデザインのポスターやチラシが制作されている。²⁵⁾また一度制作されたデザインは、ほとんど変更されることなく繰り返し別の機会でも活用されている場合があるが、そうすることによってひとつの図案のある種のシンボル・マークとして機能させる効果も期待していたといえよう。さらに雑誌類に関していえば、バルセロナでは『イスパニア(ヒスパニア)』誌(一八九

九年―一九〇三年）や『ルス（光）』誌など代表的なモデルニズムの雑誌がすでにいくつか刊行されていた。このような状況において『クアトラ・ガッツ』誌は刊行されたのである。同誌はその創刊号が一八九九年二月の第二週目に発行され、同年五月二十五日発行の第十五号で終わりを告げるという短命なものではあったが、「四匹の猫」の活動や主張を活字として伝えてくれるものとして、またその場所がモデルニズムの拠点であったことを考慮すれば、『クアトラ・ガッツ』誌をモデルニズム理解の上でも重要なものとして見てゆくことができるだろう。

三、文芸誌『クアトラ・ガッツ』

『クアトラ・ガッツ』誌では、その総合編集をロメウ、記事編集をウトリリヨそしてデザイン編集をカザスがそれぞれ担当している。それはまた、毎号全四ページからなる小冊子の体裁でもって各号の表紙はほぼ毎回異なる画家の挿絵で飾られるとともにカザスによる「四匹の猫」のマークが付されている。そして、誌面には創刊号を除き毎号ロメウの記事「テーブルについて」が含まれ、最後の四ページ目には「四匹の猫」で行われる人形劇のプログラム告知と船舶業者の商業広告を掲載しているという点が各号において共通している。また印刷業者の商業広告も掲載されているが、それは第十号から「四匹の猫」の広告に変更されている。その他誌面の内容は多岐にわたっており、ルシニョールやウトリリヨはもとよりマラガイ、エウジェニ・ドルス (Eugeni d'Ors, 1881-1954)、ラモン・

レベントス (Ramon Reventós, 1882-1923)、ウルテンシ・グエイ (Hortensi Güell, 1876-1899) などにも寄稿している。そして、『クアトラ・ガッツ』誌は美術や文学にまつわる話題を中心にカタルーニャ合唱団や戯曲、そしてカタルーニャ主義や政治家マヌエル・ドゥラン・イ・バス (Manuel Durán i Bas, 1823-1907) に関するものなど文芸にとどまらず広く同時代の時事に目を向けていることがわかる【表2】。また第十三号から第十五号にかけては、「四匹の猫」での人形劇の素材となるような作品のコンテストの募集告知を掲載するなど、『クアトラ・ガッツ』誌は「四匹の猫」で催された詩のコンクールでの受賞作品、開催する展覧会の画家を取り上げた記事やサラ・パレスの展評そして常連客の近状報告などを含み、まさに「四匹の猫」で繰り広げられた活動と連動するものとなっているのである【表2】。

一方で若い世代との関係からみれば、表紙絵ではルシニョール、カザス、リケーらに加えピチョット、ノネイ、シャビエー・ゴゼー (Xavier Gose, 1876-1915) やトゥレンらも手がけており、「四匹の猫」において個展を開催した若い世代のモデルニスタの登用もみとめられる。またピチョットを例にあげれば、一八九九年の二月から三月にかけて「四匹の猫」で行われたこの画家の個展は、続いてパリ、ベルリンそしてマドリードへと巡回し、結果的にその名がより知られるきっかけとなった。さらにその前年、ピチョットはルシニョールの著作『日々の雑記』（一八九八年）の挿絵を手がけているが、個展の最中その挿絵とともにウトリリヨによるピチョットについての記事が『クアトラ・ガッツ』誌第三号に掲載されている。加

えて『クアトラ・ガッツ』誌においてピチョットは、表紙絵の他に第三、六、十号にも挿絵が採用されており、同誌に挿絵を掲載した者のうちで最も多い数を残している。

『クアトラ・ガッツ』誌創刊の目的の中には、第一号のロメウの記事「各位」からもわかるよう「四匹の猫」で行われる活動とともにカタルーニャの文化現象、つまりモデルニズムをより公に広めることがあった。その文脈において同誌は、独自でモデルニズムの普及を展開したというよりも、むしろ当時刊行されていた他のモデルニズムの雑誌類と関係を持ちつつ行っていたといえる。例えば、『クアトラ・ガッツ』誌の創刊号そして第二、五号では一八九九年一月にロメウが開催した猫を主題とした文学作品コンテストの受賞作品群が掲載されており、そのコンテストの審査員として『ラスケリヤ・ダ・ラ・トラーチャ(トラーチャの鐘)』誌と『イスパニア』誌が参加している。そこでここからは、「四匹の猫」および『クアトラ・ガッツ』誌と、その前後に創刊された他のモデルニズムの雑誌との関係について考えてゆきたい。

先に触れた『ルス』誌(一八九七年十一月十五日—一八九八年十二月第五週目)は、ジュゼップ・M・ルビラルタ(Josep M Roviralta, 1880-1960)とリケーが中心となって発行されたものである。それは「近代芸術(アルテ・モデルノ)」を副題にアール・ヌーヴォー、象徴主義そしてフランスの雑誌『アール・エ・デコラシオン(美術と装飾)』誌に対する関心のみとめられるものであるが、⁽²⁷⁾同誌の寄稿者には「四匹の猫」の常連客や『クアトラ・ガッツ』誌の寄稿者、ルシニョール、ウトリリヨ、ノネイそ

して作曲家ジュアン・ガイ(Joan Gay, 1867-1926)などが名を連ねている。そして、ルシニョールの『日々の雑記』⁽²⁸⁾について、また僅かながらもルシニョール、ノネイたちなど個人に焦点を当てた記事もあり、なかには「四匹の猫」自体についての言及もいくつかみられる。⁽³⁰⁾加えて『クアトラ・ガッツ』誌との関係においては、同誌第三号に『ルス』誌ですでに掲載されていたアンリク・ダ・フエンタス(Enrich de Fuentes, 1864-1935)の「人形劇について」が再録されている。⁽³¹⁾一方、ベルギーの象徴主義者エミール・ヴェルハーレン(Emile Verhaeren, 1855-1916)による著作『黒いスペイン』(一八九九年)がダリオ・デ・レゴヨス(Dario de Regoyos, 1857-1913)の挿絵とともに『ルス』誌第八号(一八九八年十二月第一週目)から最終号の第十二号(一八九八年十二月第五週目)まで連載されているが、同著作はまた『クアトラ・ガッツ』誌第四号でレゴヨスによる異なる挿絵を用いて記事に取り上げられている。

アール・ヌーヴォーの要素が強い『ルス』誌と比べると『クアトラ・ガッツ』誌の方がその点は薄まってはいるものの、前述のように両者の性格そして関係者には共通点が見られる。一方で『ルス』誌が休刊した約二ヵ月後、『クアトラ・ガッツ』誌は創刊するのだが、さらにその『クアトラ・ガッツ』誌を継承するかたちで一八九九年六月三日に創刊されたモデルニズムの雑誌に『ペル・イ・プロマ(毛と羽)』誌がある。⁽³²⁾この『ペル・イ・プロマ』誌もまた記事編集をウトリリヨが、デザイン編集をカザスが手がけるといって『クアトラ・ガッツ』誌の母体を受け継ぐものである

が、『クアトラ・ガッツ』誌よりもさらにアール・ヌーヴォーの要素から離れた自然主義的傾向をみせ、またモデルニスタの挿絵をより豊富に掲載しているという特徴がみとめられる。そして『ルス』誌や『クアトラ・ガッツ』誌よりもさらにパリに関する記事が充実しており、また初期には例えばリケー、ミルなど個人を取り上げカザスによる肖像デッサンとともにそのモノグラフを採用することによってモデルニスタの紹介にも積極的に努めたものでもあった。³³ さらに創刊号から「四匹の猫」の人形劇の広告がカザスのイラストとともに掲載されており、第二号（一八九九年六月十日）からは『ペル・イ・プロマ』誌の契約購買者のリストに「四匹の猫」の名も掲載されている。

一方、一九〇〇年にバルセロナでは『ジュベントウット（若さ）』誌（一九〇〇年—一九〇六年）、『ラ・イルストラシオ・リャヴァンティーナ（東方図鑑）』誌（一九〇〇年—一九〇一年）などアール・ヌーヴォーの性格の強いモデルニズム雑誌が次々と創刊している。このような動きは他方において『クアトラ・ガッツ』誌が購買者をバルセロナの内と外に向けて呼びかけていたように、モデルニズムをバルセロナあるいはカタルーニャにとどまらせることなくより広く認知させることへの意識も含まれており、そのような目的の下にバルセロナではなくマドリッドで創刊されたモデルニズムの雑誌も存在する。その雑誌『アルテ・ホベン（若い芸術）』誌は、一九〇一年三月十日にフランシスコ・デ・アシス・ソレール（Francisco de Asís Soler）の資金提供によって準備号が創刊された。³⁴ ここでは記事編集をソレール、デザイン編集をパブロ・ピカソ

（Pablo Picasso, 1881-1973）が行い、モデルニズムをマドリッドで紹介することが目的のひとつとされてきたものであった。³⁵ 同誌では直接「四匹の猫」に言及した記事は見当たらなかったが、毎号最後のページに「四匹の猫」の広告（図5）が掲載されており、準備号にはルシニョールの記事が、また第一号ではルシニョールの特集も組まれている。反対に、『ペル・イ・プロマ』誌第七十二号（一九〇一年三月十五日）では、マドリッドのピカソと『アルテ・ホベン』誌の刊行についての記事が掲載されている。

以上にあげた雑誌群は、『クアトラ・ガッツ』誌ほどではないものの比較的短命なものが多い。また一方でそれらは完全に独立したものとはいいがたくむしろ各々がお互いに記事として取り上げ合い、共通した性格や寄稿者を持つなど何らかの形で関係を築き合い連携しているといえよう。そして情報および思想の活字化やイメージを複製し流通することが可能な雑誌という媒体は、美術のみならず音楽、芝居、文学そして政治といったジャンルを横断するモデルニズムの姿をよりよく伝えることのできる最適な手段であったのだろう。それと同時に、モデルニズムがカタルーニャという地方固有のアイデンティティーの再確認を伴う運動であることを考慮すれば、個別のモデルニズムの雑誌が相互に共鳴し、何らかの繋がりを保ちながら包括的に「モデルニズム」としてのネットワークを生成していたことは自然な姿であったのだろう。このような風潮の中、極めてアール・ヌーヴォーや象徴主義的である『ルス』誌とアール・ヌーヴォーの装飾的要素から距離を置き、よりロートレックやスタンランに負う自然主義的傾向をみせる『ペル・イ・プロマ』

誌との狭間にあつて、双方に関わりのあつた「四匹の猫」と『クアトラ・ガッツ』誌は、モデルニズムがその有様を移行してゆく渦中においてまさに中心的な場であり、中継地でもあつたといえる。

結びにかえて

本稿では、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてスペイン、カタルーニャ地方を中心に高まりをみせたモデルニズムの運動ととりわけその中心となつたバルセロナの居酒屋「四匹の猫」、そしてそこに集うモデルニスタたちの活動をみてきた。モデルニズムがピレネー山脈の向こう側、特にパリから最新の芸術動向を輸入することへの関心と同時にカタルーニャ固有の伝統を見直そうという風潮の中に起こる様々なジャンルに広がりをもつ動きならば、モンマルトルのキャバレー「黒猫」を受け継ぐ形で開店し、美術のみならず、文学、演劇、音楽そして表面的ではないにせよカタルーニャ主義運動といった活動を展開していた「四匹の猫」はまさにモデルニズムを具現化する存在であつたといえるだろう。そして「四匹の猫」およびモデルニズムの活動普及のために発行された文芸誌『クアトラ・ガッツ』にも同様の点がみとめられる。加えて、「四匹の猫」と同誌を他のモデルニズム雑誌との相互関係の中に見てみると、モデルニスタが雑誌という媒体を介してあたかもエール交換のように共鳴し合い、それがお互いにモデルニスタ、つまり同士であることの連帯感の強化へも繋がつていったと考えられる。

ルシニョールの作品(図1)に再び立ち返ってみれば、それはパリ、

モンマルトルのカフェを背景としているものの描かれている人物たちは、手前はカザス、後景で新聞を手にするのはウトリリヨそしてその左にはクララソといったカタルーニャのモデルニスタたちである³⁶。この作品は先述した一八九〇年のサラ・パレスでの展覧会に出品されたものであるが、同展に出品された作品にはルシニョールとカザスの共同制作による手前にルシニョール、後景にカザスが描かれた『お互いに描く』(図10)のようなものもある。このようなモデルニスタが自身やモデルニスタたちをモデルニズムの様式でもって表現するという試みは、「四匹の猫」に飾られたカザスによる大型の二作品にも見ることができよう。さらに一九〇〇年二月に「四匹の猫」で行われたピカソ自身の初個展には数点の油彩画と一五〇点あまりのデッサンが展覧され、その大部分がモデルニスタを中心に彼の周囲にいる人々を描いたものであつた³⁷。このようなピカソの姿勢は前年の十月二十六日から『ペル・イ・プロマ』誌の主催でサラ・パレスにて開催されたカザスの個展(図11A・B)に影響を受けてのことと指摘されている³⁸。だがそれゆえのみならずまたピカソの個展のみならず「四匹の猫」の室内装飾にもいえるようモデルニズムに関わる者がモデルニスタを描きそれを展覧あるいは飾ること、そしてそれが受け入れられるという環境の基底にモデルニスタ同士の連帯感の表明あるいは連帯を形成したいという欲求を見ることは可能ではないだろうか。そしてモデルニズムの雑誌面上においてモデルニスタの活動とその個人のモノグラフを採択することもまた、ただたんに自分たちの活動を紹介するにとどまらず、モデルニスタ同士の仲間意識の強化・確認にも繋がつていったと考えられる。

本稿ではバルセロナの「四匹の猫」を中心にモデルニズムの、その一端を見たにすぎないが、モデルニスタたちの多くが異国の地パリを訪れ、少なからずとも同地にとどまり生活をする中でどのようなコミュニケーションを形成していったのかという点も視野に入れつつ、彼らがいかに独自のネットワークを築き上げていったのかそしてその意義について、より精査してゆくことを今後の課題としたい。

註

- (1) 閉幕は同年十二月三十一日である。
- (2) 一八八八年バルセロナ万博にこつてGRAU (Ramon), LÓPEZ (Marina) ed., *Exposició Universal de Barcelona: llibre del centenari, 1888-1988*, Barcelona, 1988.
- (3) 「モデルニズム(ムダルニスム)」という言葉が最初に登場したのは一八八四年一月十五日『ラベンス(進歩)』誌上である。この用語については MARRANY (Joan Lluís), *Aspectes del Modernisme*, Barcelona, 1975.
- (4) MARAGALL (Joan A.), *Historia de la Sala Parés*, Barcelona, 1975, pp.45-58; FONTBONA (Francesc), "From the Sala Parés to the Art of the Slums via Els Quatre Gats", AMSTERDAM, *Ex. Cat., Barcelona 1900*, 21 September 2007-20 January 2008, Van Gogh Museum, Brussels, 2007, pp.129-40. サラ・パレス (Sala Parés) はジュアン・B・パレス (Joan B. Parés) が旧市街に開設したバルセロナ初の商業画廊である。もともと一八四〇年に画材屋として出発したものであるが、一八七七年からその一角を画廊とした。そしてここは、モデルニズム絵画の普及に重要な役割を果たしたのである。
- (5) ルシニョールは絵画五十点、カザスは絵画三十六点、クララソは彫刻十三点を出品した合計九十九点による展覧会であった。
- (6) カザスは一八八一年、最初にパリを訪れカルロス・デュラン (Carolus-Duran) のアトリエに学んだ。一八八二年にルシニョールの最初のクララソを介してカザスと知り合う。一方ルシニョールの最初のパリ訪問は一八八六年の新婚旅行であったが本格的なパリ滞在は一八八九年九月からとなり、モンマルトルのオテル・ド・ブリュクセルに三ヶ月ほど滞在した後、クララソやミケル・ウトリリヨ (Miquel Utrillo) らと共同生活を行った。またルシニョールとウトリリヨはパリ滞在中に同地の様子を綴った記事を『ラ・バンガアルデア (前衛)』紙へ寄稿している。
- (7) 一種の「パリ詣で」ともいえるこの風潮は、後にバプロ・ピカソ (Pablo Picasso) の秘書となるジャウマ・サバルテス (Jaume Sabartés) の次の言葉が端的に伝えてくれる。

「パリがある。ヨーロッパがある。だが、ピカソはまだピレネーさえ越えてはいなかった。私たちは北方のモダニズムにむしばまれた空気を吸っていた。ただ唯一重要なものはパリの流行だったんだ」。SABARTÉS (Jaime), *Picasso. Portraits et souvenirs*, Paris, 1946, pp.60-61. (シエーム・サバルテ 益田義信訳「親友ピカソ」美術出版、一九五〇年、七十二頁。)
- (8) CASELLAS (Raimon), "Bellas artes. La exposició de Sitges", *La vanguardia*, 27 de agosto de 1892.
- (9) 「カウ・ファラット」の名前の由来は、もともと一八八七年からルシニョールがクララソと共同で使用していたバルセロナのムンタネー通りにあるアトリエの名「鉄の隠れ家」に由来する。そこにはルシニョールが集めていた鉄製品が置かれており、またそこは知識人や芸術家たちの溜まり場ともなっていた。
- (10) 『ラベンス』誌は外国の著名な戯曲を上演することによってカタルーニャの劇場再生を図り、かつそのような戯曲の翻訳を推進することでカタルーニャ語の一般化に力を注いだ。
- (11) 現在のカウ・ファラット美術館の姿がそれであり、同館が美術館となったのはルシニョールの死後、一九三三年四月十六日である。カウ・ファラットは

- 二階建てで、一階がルシニョールの生活の場として、二階の大部屋は主に蒐集品の展示室として、また様々な催しの会場として用いられた。
- (12) これらの作品は、ルシニョールが一八九四年春にバスタ出身の画家イグナシオ・スローマーガ (Ignacio Zuloaga) を介してパリで購入したものである。
- (13) CASACUBERTA (Margarida), “L’Intel·lectual modernista”, SITGES, *Ex. cat. Rusiñol, desconegut*, 21 d’octubre-30 de novembre de 2006, Mercat Vell de Sitges etc., Sitges, 2006, pp.188-215.
- (14) 「花の宴」は中世に起源を持つ文芸の競技であり、カタルーニャ語復興の気運に伴い一八五九年から再開された。
- (15) *Festa Modernista del Cau Ferrat*, Barcelona, 1895 (1990).
- (16) “La festa artística de Sitges”, *La vanguardia*, 16 de febrero de 1897.
- (17) 内容はジュブキム・ニン (Joaquín Nin) によるコンサート、イグナシオ・イグナシオ (Ignasi Iglesias) の詩二編、ルシニョールによるオペラ『魂を去りし喜び』(一八九八年) が上演された。
- (18) 「黒猫」はロドルフ・サリ (Rodolphe Salis) により一八八一年から一八九七年三月十七日まで開店していた。
- (19) EL CABALLERO MICIFUZ, “Els IV Gats. Al gentil hombre tabernero Rodolfo de Salis, Señor de Chatnoiville, Caballero de la Butte Sacrée, capitán de tercios bohemios, etc.”, *La vanguardia*, 1 de julio de 1897. 「黒猫」から「四匹の猫」への影響関係については MENDOZA (Cristina), “Le Chat Noir et Els Quatre Gats”, PARIS, *Ex. cat., Paris Barcelona, de Gaudi à Miró*, 9 octubre 2001-14 janvier 2002, Galeries nationales du Grand Palais, 28 février-26 mai 2002, Barcelone, Museu Picasso, Paris, 2001, pp.198-215.
- (20) その他バルセロナ商工会議所会頭マヌエル・シローナ (Manuel Girona) や企業家マテイアス・アルゼニス (Mates Ardeniz) の経済的援助によることも大きかった。また、「四匹の猫」には「つくわすかな人数」という意味もある。
- (21) 「四匹の猫」の活動については JARDÍ CASANY (Enric), *Història de els quatre gats*, Barcelona, 1972.; McCULLY (Marilyn), NEW JERSEY, *Ex. Cat., Els Quatre Gats. Art in Barcelona around 1900*, 29 January-26 March 1978, The Art Museum of Princeton University, 14 April-26 June, 1978, Washington D. C., Hirshhorn Museum and Sculpture Garden, Smithsonian Institution, New Jersey, 1978.; PALAU I FABRE (Josep), *Picasso vivent (1881-1907)*, Barcelona, 1980. (ピタゴ・ヤ・トマソン (ユゼップ) ‘大高保二郎’ 永澤峻 訳『不滅のピカソ 1881-1907』平凡社、一九八三年、一二六―一二九、一五七―一六〇頁。) ; DONATE (Merçè), “Art Activity and Els Quatre Gats”, BARCELONA, *Ex. Cat., Picasso at Els 4Gats, The Early Years in Turn-of-the-Century Barcelona*, November 1995-February 1996, Museu Picasso, Toronto, 1996, pp.223-36.; BARCELONA, *Ex. cat., Quatre gats: de Casas a Picasso*, 7 de julio-4 de septiembre de 2005, Museo Diocesano de Barcelona, 8 de Septiembre-23 d’octubre de 2005, Museo de Arte Moderno de Tarragona, Barcelona, 2005.
- (22) 二作品は後述『ピル・イ・プロト』誌に掲載された。その中には「十九世紀の終わりと二十世紀の始まり」という題が付けられている。その点からみれば、作品が、当時々のように受けとめられたかがうかがえるだろう。Pel & Ploma, núm.78, juliol de 1901, pp.62-63.; MENDOZA (Cristina), “Quatre Gats and the Origins of Picasso’s Career”, OHIO, *Ex. Cat., Barcelona and Modernity: Picasso, Gaudi, Miró, Dalí*, 15 October 2006-7 January 2007, The Cleveland Museum of Art, 7 March-3 June 2007, The Metropolitan Museum of Art, New Haven and London, 2006, pp.80-82.
- (23) 図録の表紙にはカザスが手がけたロメウと四匹の猫による図柄があり、これは「四匹の猫」のトレードマークとして、レターヘッド、招待状として『クアトラ・ガツ』誌の表紙などにも用いられた。
- (24) TRENC BALLESTER (Eliseu), “Graphic Arts in Catalonia, 1888-1936”, LONDON, *Ex. Cat., Homage to Barcelona, The City and its Art 1888-*

- 1936, 14 November 1985-23 February 1986, Hayward Gallery, London, 1985, pp.241-52.; TRENC (Eliseu), "Modernista Illustrated Magazines", OHIO, *op.cit.*, 2006, pp.61-67.
- (25) 「四匹の猫」での印刷物の制作は、中世の職人工房にそのルーツが指摘される。QUÍLEZ I CORELLA (Francesc M.), "Graphic Art of the Quatre Gats", OHIO, *op.cit.*, 2006, pp.93-95.
- (26) 創刊号のみ正確な発行日は記載されていない。第二号からは毎週木曜日に発行されている。また、『シユマン・ミロ (Joan Miró) の表紙絵』の中に『クアトラ・ガッツ』誌の第二期第一号が、一九七八年のメルセの祝日に合わせて発行されている。
- (27) 例えは一八九八年第五号では、ユトリリヨが中心となっており、ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ (Pierre Puvis de Chavannes) の特集号を組んでくる。Luz, núm.5, 2ª semana de noviembre de 1898.
- (28) ROVIRALTA (José M.^a), "Santiago Rusiñol en «Fulls de la vida»", Luz, 2ª semana de octubre de 1898, pp.3-4.; ROVIRALTA (José M.^a), "Ramon Pichot en la ilustración de «Fulls de la vida»", Luz, núm.2, 3ª semana de octubre de 1898, pp.19-20.
- (29) ROVIRALTA (José M.^a), "Santiago Rusiñol", Luz, núm.1, 15 de noviembre de 1897, pp.2-3.; BARÁN (A. L. de), "Arte nuevo, Isidro Nonell", Luz, núm.9, 2ª semana de diciembre de 1898, pp.98-99.
- (30) "Arte y literatura", Luz, núm.4, 31 de diciembre de 1897, p.10.; "Arte y literatura", Luz, núm.5, 15 de enero de 1898, pp.8-9.; ROVIRALTA (José M.^a), "Juan Gay y José Lapeyra, directores de la «Institución Catalana de Música»", Luz, núm.6, 31 de enero de 1898, p.5.; "Nuevas", Luz, núm.6, 3ª semana de noviembre de 1898, p.69.; FUENTES (Enrich de), "En titella", Luz, núm.7, 4ª semana de noviembre de 1898, pp.75-76.; BARÁN (A. L. de), "Arte nuevo, Dario de Regoyos", Luz, núm.8, 1ª semana de diciembre de 1898, pp.86-87.; BARÁN (A. L. de), "Arte nuevo, Isidro Nonell", núm.9, 2ª semana de diciembre de 1898, pp.98-99.
- (31) FUENTES (Enrich de), "En titella", núm.7, 4ª semana de noviembre de 1898, pp.75-76.
- (32) 『クアトラ・ガッツ』誌第十五号のロメウの記事「テーブルについて」に引き継ぎの旨が記されている。『ベル・イ・プロマ』誌第一期（一八九九年六月三日—十二月二十三日）は一週間毎に『クアトラ・ガッツ』誌と同じ全四ページからなる小冊子の仕様で発行された。
- (33) *Pel & Ploma*, núm.5, 1 de juliol de 1899, p.2, 4.; *op.cit.*, núm.12, 19 de agosto de 1899, p.4.
- (34) 創刊号に続き第一号（三月三十一日）、第二号（四月十五日）、第三号（五月三日）、第四号（六月一日）が刊行された。また一九〇九年九月に第二期第一号も刊行されている。『アルテ・ホベン』誌でもその色刷りの使用は減るものの、『クアトラ・ガッツ』誌や『ベル・イ・プロマ』誌第一期の体裁と同じような全八ページからなる小冊子の仕様がとられており、そのタイトルは『ルク』誌の記事（"Arte joven por. A. L. de Baran", Luz, 2ª semana de octubre de 1898, p.2.）に由来する。この雑誌について HERRERA (Javier), *Picasso, Madrid y el 98: la revista «Arte Joven»*, Madrid, 1997.
- (35) パラウ・イ・フアブレ (ジュゼップ)、前掲書、一九八三年、二一六—二七頁。『アルテ・ホベン』誌にミゲル・デ・ウナムーン (Miguel de Unamuno)、ピオ・バロジャ (Pío Baroja)、マゼンタスなどが寄稿している。挿絵に關しては、その大部分がウナムーンに属している。
- (36) LAPLANA (Josep de C.), PALAU-RIBES O'CALLAGHAN (Mercedes), *La pintura de Santiago Rusiñol: obra completa*, Barcelona, 2004, 3vols., p.145.
- (37) GUAL (Malén), "El primer contacto con la vanguardia. Barcelona 1899-1900", OCAÑA (Maria Teresa) ed., *Picasso, la formación de un genio 1890-1904*, Barcelona, 1997, pp.177-87.
- (38) MENDOZA (Cristina), "Casas and Picasso", BARCELONA, *op.cit.*, 1996, pp.21-32.

付記

・本文、註、表、図版キャプションにおける外国の固有名詞の日本語表記に
関して、原音に近い表記を心がけたが、慣例を優先した場合もある。

・『クアトラ・ガッツ』誌についてその画質は良質とはいいたいが、以下
のウェブ・サイト <http://www.luisvives.com/hemeroteca/quatre/gats/> の画
像として見ることができる。また、カタルーニャ州立図書館のウェブ・サ
イトにおいて、『ラ・イルストラシオ・リャヴァンティーナ』誌 (<http://www.cervantesvirtual.com/hemeroteca/include/plantilla.jsp?revista=ilustracio&seccion=cat>) は画像として『ルス』誌 (<http://www.cervantesvirtual.com/servei/SirveObras/bc/01604418436705993090035/index.htm>) の『マルテ・ホベン』誌 (<http://www.cervantesvirtual.com/servei/SirveObras/bc/12826844229066069643624/index.htm>) はその記事と挿絵の大部分が閲覧
できるよつになつてゐる。

孝岡睦子（たかおか・ちかこ）

二〇〇一年 神戸大学文学部卒業

二〇〇四年 神戸大学大学院文学研究科（修士課程）修了

現在 神戸大学大学院文学研究科（博士課程後期）在籍

財団法人大原美術館（学芸員）勤務



図1. サンティアゴ・ルシニョール《モンマルトルのカフェ》1890年、キャンバス・油彩、
80×160cm、モンセラート、モンセラート美術館



図 2A. カウ・ファラット美術館内部一階



図 2B. カウ・ファラット美術館内部二階



図3. リュイス・ラバルタ《グレコの行列（第三回モデルニズムの祭典）》
1894年、紙・鉛筆とグアッシュ、26.7×39.2cm、シヅヤス、個人蔵



図4. ミケル・ウトリリヨ『「妖精物語」の宣伝ポスター』1897年、リトグラフ、
167×72cm、シヅヤス、カウ・ファラット美術館

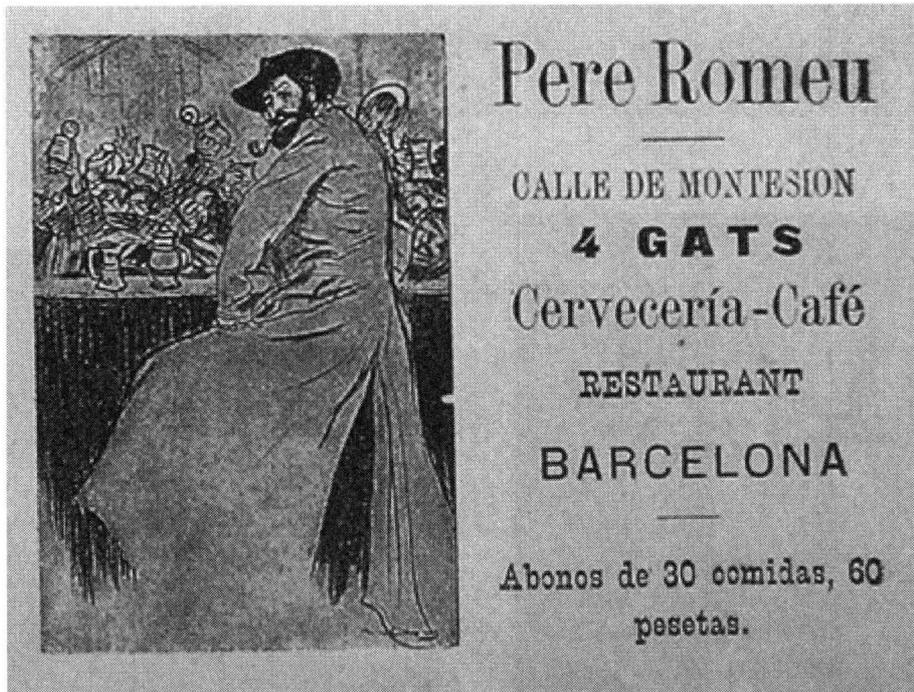


図5. ラモン・カザス『アルテ・ホベン』誌準備号（1901年3月10日）8頁より抜粋

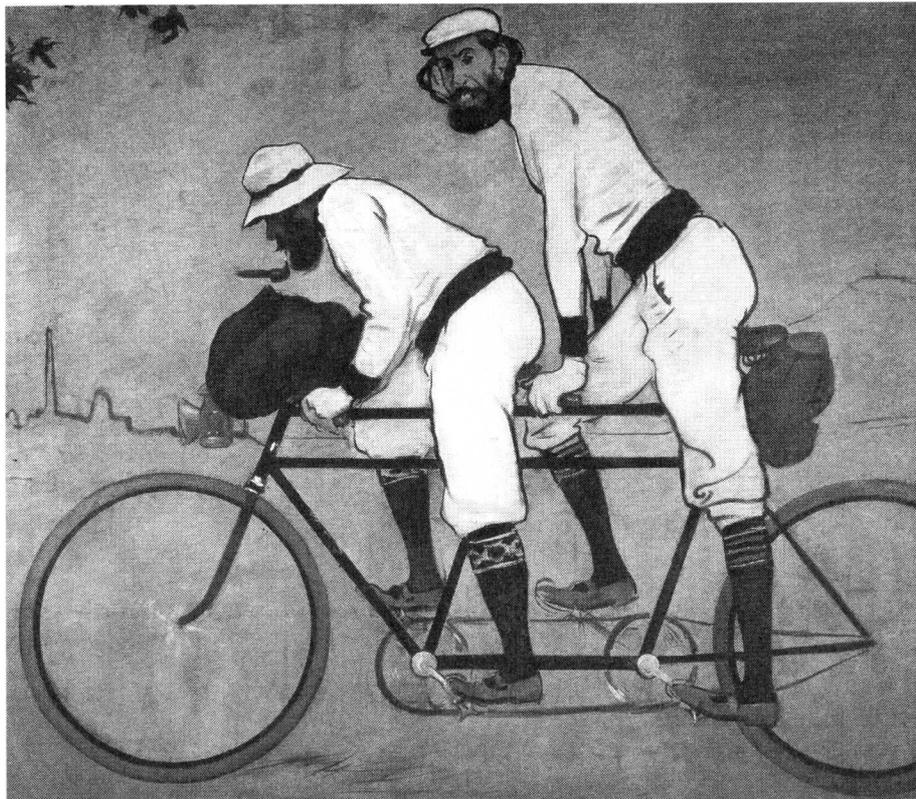


図6. ラモン・カザス《二人乗り用自転車に乗るラモン・カザスとペラ・ロメウ》1897年、キャンバス・油彩、191×215cm、バルセロナ、カタルーニャ州立美術館



図 7 B. リカルド・オピッツ《四匹の猫》1899年、紙・水彩、46×54cm、個人蔵



図 7 A. 「四匹の猫」内部、1899年頃



図 8 B. リカルド・オピッツ《四匹の猫》1900年頃、紙・木炭、個人蔵



図 8 A. 「四匹の猫」内部、1900年頃

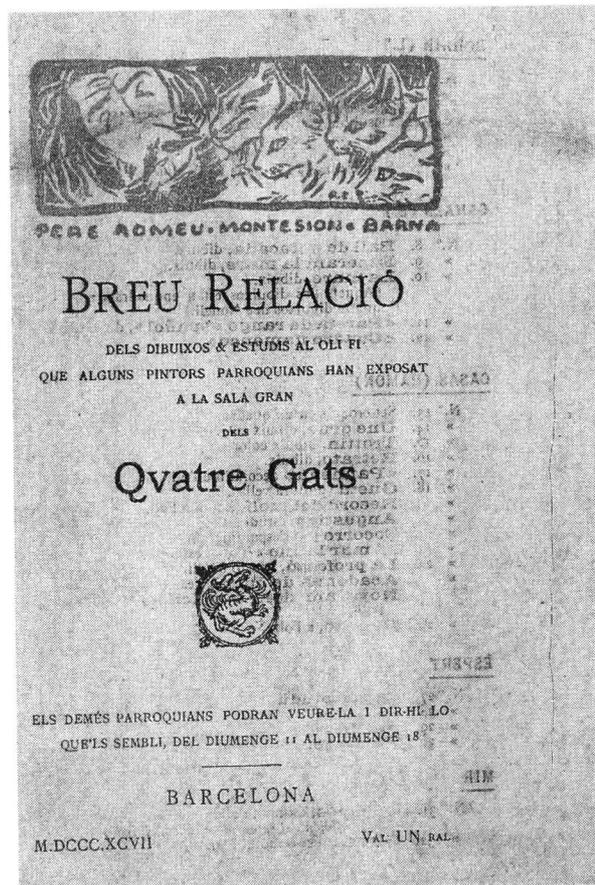


図9. 『ラベンス』誌発行
 『「四匹の猫」サラ・グランでの素描・油彩作品展示（1897年6月11日～18日）目録』
 1897年6月、バルセロナ、カタルーニャ州立美術館附属図書館



図10. サンティアゴ・ルシニョール、ラモン・カザス《お互いに描く》1890年、
 キャンバス・油彩、60×73cm、シッジャス、カウ・ファラット美術館

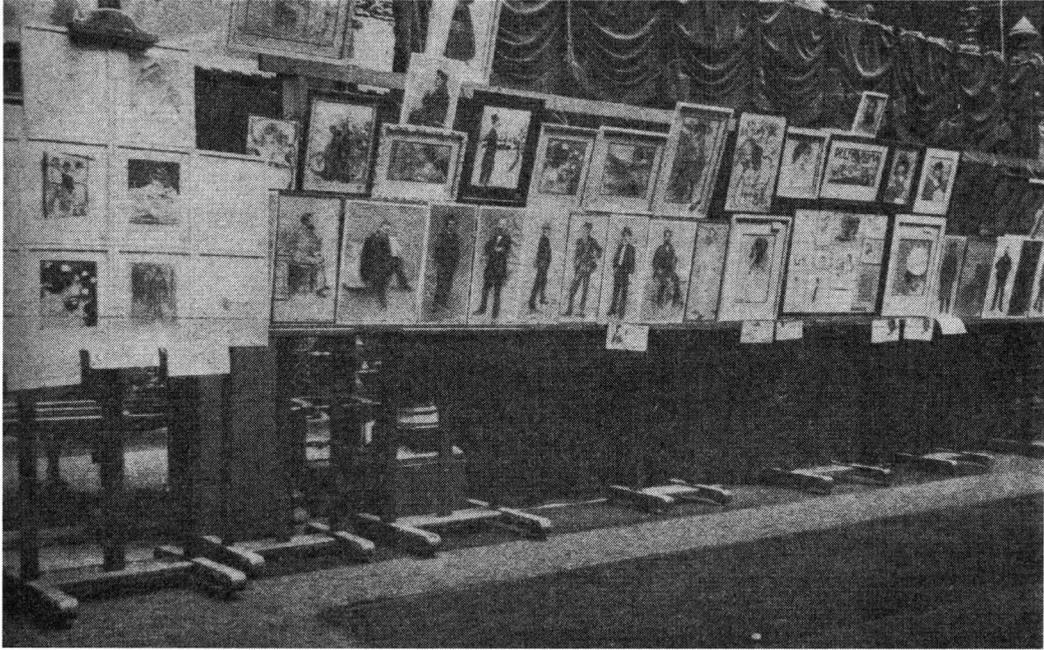


図11A. 「サラ・パレスー通り側」『ペル・イ・プロマ』誌第24号（1899年11月11日）3頁



図11B. 「サラ・パレスー中央部分」『ペル・イ・プロマ』誌第24号（1899年11月11日）4頁

【表1】「四匹の猫」略年譜

年	月	活動
1897年	6月	6月12日：ブッチ・イ・カダファルク（Puig i Cadafalch）設計のカザ・マルティ（ムンテシオ通り）にペラ・ロメウ（Pere Romeu）らが開店。
	7月	7月11～18日：初の展覧会となるグループ展開催。 ⇒計64点。リュイス・ボンニン（Luís Bonnin）、リカルド・カナルス（Ricard Canals）、ラモン・カザス（Ramon Casas）、アスペルト（Espert）、ジュアキン・ミル（Joaquin Mir）、イジドラ・ノネイ（Isidre Nonell）、ラモン・ピチョット（Ramon Pichot）、ミケル・ウトリリヨ（Miquel Utrillo）、アベリ・トゥレン（Eveli Torent）、サンティアゴ・ルシニョール（Santiago Rusiñol）が参加。
	年末	カザスとウトリリヨが影芝居の上演告知ポスターを制作。
1898年	12月	12月29日：影芝居第一期（～1898年2月）の上演開始。毎週月・水・日曜日の午後。 デザイン、音楽そして台本は「四匹の猫」のメンバーが手がけた。 テクニカル・プロデューサーはウトリリヨとロメウ。ウトリリヨの落成スピーチにより開幕。 (演目) ・ヘンリー・サム（Henry Somm）『象』 ・ジュアン・マラガイ（Joan Maragall）『モンセラート山』 歌唱/サルバドール・ビララグート（Salvador Vilaregut）、伴奏/アンリク・モレラ（Enric Morera）、 デザイン/ウトリリヨ ・ジュゼップ・M・ジュルダ（Josep M. Jordà）『一束の水仙』 デザイン/ピチョット、伴奏/ジュアン・ガイ（Joan Gay） ・アンリク・ダ・フエンタス（Enric de Fuentes）『「四匹の猫と黒服との愉快な旅」または「ペラ・ロメウの往来」』 デザイン/カザス
	1～2月	1月6日～2月2日：子供のための影芝居を行う。 2月上旬：影芝居の演目変更。 ⇒上記サムとマラガイの作品がコメディ2作トゥレンの『挑戦』とサムの『怒れる心』に変更される。
	3月	3月14日：影芝居第二期の上演開始。 (演目) ・『月夜』 デザイン/ジュリ・バルミチャーナ（Juli Vallmitjana） ・『ナザレのイエス』 デザイン/ボンニン、音楽/フランセスク・ジネスタ（Francesc Ginesta） *後に演目が『聖体の祝日』と『三人の王』に変更される。
1899年	4月	4月19日：影芝居に音楽コンサートを導入。
	夏前	影芝居の上演休止。
	6月	6月28日：人形劇の上演開始。 ⇒ジュリ・ピー（Juli Pi）とその息子ジュリアー（Julià）の一座による上演。 カザスが人形劇告知ポスターを手がける。
	11月	人形劇が定期的に行われるようになる。 毎週月・水・金の10時からと火曜日の4時30分から。また後に日曜の午後には子供向けの上演が行われるようになる。プログラムは頻繁に変わり、ドラマ、コメディ、ファンタジーなどを混ぜ合わせたバラエティに富んだものであった。 初の個展が開かれる。 ⇒ダリオ・デ・レゴヨス（Darío de Regoyos）の個展。
	12月	12月4日～20日：ノネイの個展（素描80点）。
	不明	二人のピアニスト、エンリケ・グラナドス（Enric Granados）とホアキン・マラツ（Joaquim Malats）が、フランス人作曲家ヴァンサン・ダンディ（Vincent d'Indy）へのオマージュの催しで『トゥルルート』を演奏。
1899年	1月	1月上旬（1月4日頃）：ルベン・ダリオ（Ruben Darío）が「四匹の猫」を訪れ人形劇を見る。 *ルベン・ダリオ著作『同時代スペイン』（1901年）。 鳩飼育者協会が会合を行う。 1月30日：ロメウが猫を主題としたユーモア文学作品のコンテストを開催。
	2～3月	ビラノバ・カーニバルのためのポスターが展示される。 ⇒大賞はジュアン・リャバリアス（Joan Llaverias）。ビラノバ・イ・ラ・ジェルトルからの巡回展。 第二週目：文芸誌『クアトラ・ガッツ』創刊（全15号）。 ⇒総合編集：ロメウ、記事編集：ウトリリヨ、デザイン編集：カザス。 2月20日～3月5日：ピチョットの個展（絵画15点、素描30点）。 ⇒画題は主に教会内部、風景、ジブシー。

年	月	活動
1899年	4~5月	4月25日~5月10日：シャビエー・ゴゼー (Xavier Gosé) の個展 (彩色あるいは木炭による素描38点)。 ⇒画題は主に波止場、郊外そして墓地。
		5月15~30日：トゥレンの個展。 ⇒夜景、夜明けの墓地、教会内部などを描いた絵画と素描を展示。
		5月25日：『クアトラ・ガッツ』誌終刊。 ⇒継続雑誌は『ペル・イ・プロマ (毛と羽)』誌。
	6月	開催日不明：オランダ人画家エンリケ・ムルダー (Enrique Mulder) の個展。 6月3日：『ペル・イ・プロマ』誌創刊 (全100号、~1903年12月)。 ⇒記事編集：ウトリリヨ、デザイン編集：カザス
	7月	開催日不明：フランセスク・カルボー (Francesc Carbó) の個展。 7月8日~28日：ジュセップ・ダルマウ (Josep Dalmau) の個展。 ⇒色鮮やかに人物や風景を描いた絵画と素描を展示。
10月	カタルーニャ自治推進クラブが講演「民主主義連合協会」のために集まる。	
12月	アウジャンウ・ルザリヨ (Eugenio Roselló) が蓄音機紹介のために講演「エジソン—偉大なる人」を行う。	
1900年	1月	1900年カーニバルのために開かれたポスター・コンクール出品作品による展覧会。 ⇒一等賞受賞者はなかったが、カルラス・カザジェマス (Carles Casagemas)、パブロ・ピカソ (Pablo Picasso) など6人が奨励賞 (賞金100ペセタ) を受けた。審査員としてミル、マヌエル・ウゲー (Manuel Hugué) などが参加。
	2月	2月1日：ピカソが初めての個展。 ⇒木炭による知人たちの肖像画100点以上および《臨終》を含む絵画2点といくつかの彩色素描を展示。
	3~4月	3月7日~25日：カルロス・バスケス (Carlos Vázquez) の個展 (絵画17点)。 3月26日~4月10日：カザジェマスの個展 (素描)。
	7月	ピカソが2回目の個展 ⇒闘牛を主題とした作品4点を含む。
	11月	ジュアキン・ニン (Joaquín Nin) によるピアノ・リサイタル。
1901年	6月	6月1日：『ペル・イ・プロマ』誌第77号でウトリリヨがピカソについての記事を掲載。 ⇒サラ・バレスに展示されたピカソのパステル画を絶賛した。
	10月	「ワーグナー協会」設立。 ⇒ワーグナーの作品を積極的に広め出版することを主たる目的とした団体。
	11月	11月1日：「葬送の夕べ」開催。 ⇒ピアニストのファラン・ピア (Ferran Via) がワーグナー、ベートーヴェンらによる葬送曲を演奏。 集会「芸術と祖国」に合わせて、講演と詩会とともに行われた。
1902年	3月	スペイン版画・ポスター収集家協会「イスパニア」が会合を行う。
	6月	フランセスク・タレーガ (Francesc Tàrraga) がシューマン作『幻想曲』、アルベニス作『スペイン風セレナータ』と『グラナダ』そして自作『ホタとトレモロ』のコンサートを開催。
1903年	3月	「アルス・ネグラス」によるグループ展開催。 ⇒アンリク・カザノバス (Enric Casanovas) による彫刻、マヌエル・アイナウド (Manuel Ainaud) による素描、そしてクラウディ・グラウ (Claudi Grau) による絵画で構成。 3月24日：ジャウマ・サバルテス (Jaume Sabartés) が詩会を開催。
	4月	最後の展覧会開催。 ⇒ドイツ人画家ヴァルデマー・トーン (Waldemar Thorn) の個展。
	6月	6月26日：「四匹の猫」閉店。 ⇒建物は「聖ルカ芸術協会」の手に渡り、展示会場となる。

その他時期が不明な活動

展覧会	リカルド・カナルス (Ricardo Canals)、ルイザ・ビダル (Luïsa Vidal)、イグナシオ・スロアーガ (Ignacio Zuloaga)、ジュゼ・アントニオ (José Antonio)、リカルド・オピッソ (Ricard Opisso)、ジュセップ・M・シロー (Josep M. Xiró)、ジャウマ・パイサー (Jaume Pahissa)
音楽	作曲家イサーク・アルベニス (Isaac Albéniz)、ギタリストのミケル・リョベート (Miquel Llobet)
ゲスト	ヴァンサン・ダンディ (Vincent d'Indy)、ミゲル・デ・ロス・サントス・オリバ (Miguel de los Santos Oliver)、キンテロ兄弟 (Quintero)、エミリオ・ジュノイ (Emilio Junoy)、カルロス・コスタ (Carlos Costa)、アントニオ・リベラ (Antonio Ribera)、ラ・ドゥース (La Duse)
文学	イグナジ・イグラジラス (Ignasi Iglesias)、エドゥアルド・マルキナ (Eduard Marquina)

(主要参考文献)

JARDÍ CASANY (Enric), *Història de els 4 gats*, Barcelona, 1972.

BARCELONA, *Ex. Cat., Picasso and Els 4 Gats, The Early Years in Turn - of the - Century Barcelona*, Toront, 1996.

PARIS, *Ex. cat., Paris Barcelona, de Gaudí à Miró*, Paris, 2001.

【表2】『クアトラ・ガッツ』誌（1899年）目録

号数発行月日	タイトル	作者/寄稿者	頁
第1号2月		ラモン・カザス Ramon Casas	表紙絵/p.1
	「各位」 A tothom	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「ラスケリャ・ダ・ラ・トラージャ」誌賞受賞 「雌猫に」(マドリガル) (Premi ofert per «L'Esquella de la torratxa») A una gata (Madrigal)	クンラト・ロウラ Conrat Roure	p.2
	ラモン・カザス賞受賞 「修士の猫」 (Premi ofert per D. Ramon Casas) El gat dels freres	J・セッラ・イ・クンスタンソ J. Serra y Constansó	p.2
	主人ベラ・ロメウ大賞受賞 「猫たちの夜明け」 (Primer premi ofert per L'Hostaler Pere Romeu) La albada dels gats	ギリエム・A・テイ・イ・ラフオント Guillém A. Tell y Lafont	pp.2-3
	「イスパニア」誌編集者賞受賞 「猫」 (Premi ofert per l'editor de l'«Hispania») Lo gat	ジュアン・ベタ・マルティ・イ・ナバルラ Joan Bta. Martí y Navarre	pp.3-4
	第2号2月16日	《フィギュレータ》 La figuereta	J・ミル J. Mir
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	ジュリ・バルミチャーナ賞受賞 「なんて猫なんだ!」(モノローグ) (Premi ofert per D. Juli Vallmitjana) ¡Quin gat! (Monólech)	ベラ・クルメ・イ・フォルス Pere Colomé y Fors	p.2
	「エクスタシー」 Extasis	アベラス・メストラス Apeles Mestres	p.2
	「母」 Una mare	J・アラダーン J. Aladern	p.2
	ノネイ賞受賞 「タクレタ婦人の猫」 (Premi ofert per D. I. Nonell) Lo gat de Donya Tecleta	サンティアゴ・ルーラ・イ・クロン Santiago Rura y Colom	p.3
	「ノクターン」 Nocturn	ジュアン・ボンズ・イ・マッサベウ Joan Pons y Massaveu	pp.3-4
第3号2月23日	《アルバイシンより》 De l'Albaicin	ラモン・ピチョット Ramon Pichot	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「ソネット」 Sonet (traducció del Itàlia Stechetti)	R・E・バッサゴダ R. E. Bassegoda	p.2
	「人形劇について」 En titella	アンリク・ダ・フエンタス Enrich de Fuentes	p.2
	「ラモン・ピチョット」 En Ramon Pichot	M・ウトリリヨ M. Utrillo	p.3
	「はかなさ」 Instantánea	J・ヌベリャス・ダ・ムリンス J. Novellas de Molins	p.3
	S・ルシニョール著作「日々の雑記」より Del llibre «Fulls de la vida» de S. Rusiñol	ラモン・ピチョット Ramon Pichot	挿絵2点/p.3
	「記事」 L'Article	J・B・マルティ・イ・ナバルラ J. B. Martí y Navarre	pp.3-4
	「マドリード征服」 La conquista de Madrid	クアトラ・ガッツ Quatre Gats	p.4
	「猫のベッド」(速い調子で) Lo llit de la mixeta (scherzo á tres temps)	マネル・ルカモラ Manel Rocamora	p.4
	第4号3月2日	《物乞い》 Demanant caritat	I・ノネイ I. Nonell
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「キスのバラード」 La balada del bès	ジュアン・マラガイ Joan Maragall	p.2
	「悪魔の橋」(童話) Lo pont del diablillo (cuento per noys)	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	pp.2-3
	「奴隷の歌」 Cansó d'esclava	ジュゼップ・アラダーン Joseph Aladern	p.3
	「ピチョットの展覧会」 L'Exposició d'en Pitxot		p.3
	「黒いスペイン」(エミール・ヴェルハーレン・ダリオ・デ・レゴヨス) España negra (Emile Verhaeren-Dario de Regoyos)	ミケル・ウトリリヨ(?) M. U. D・デ・レゴヨス D. de Regoyos	pp.3-4 挿絵2点 /pp.3-4
	「新任の司教」 El nou senyor bisbe		p.4
	「聖母」 La Mariani		p.4

号数発行月日	タイトル	作者/寄稿者	頁
第5号 3月9日		サンティアゴ・ルシニョール Santiago Rusiñol	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	クンラト・ロウラーベラ・ロメウ Conrat Roure - Pere Romeu	p.2
	「四匹の猫」コンクール ディオニス・ブッチ賞受賞 「屋根の上の夜」 (Premi ofert pe D. Dionis Puig, en lo certamen dels 《Quatre Gats》) La nit a la teulada		p.2
	「サラ・バレス」 Saló Parés	P. del X.	p.3
	「決定的な死」 Macabra Vital	ブンベイウス・ジャーネー Pompeyus Gener	p.3
	「マナル・ドゥラン・イ・バス氏の場合」 Éxom. Sr. D. Manel Durán y Bás		p.3
		ラモン・カザス Ramon Casas	挿絵1点/p.3
	「バリのサロン」 Els salóns de París	ミケル・ウトリリヨ (?) M. U.	p.3
	「リアリズム」 Realisme	P・クルメー P. Colomer	p.4
	「永劫の音楽」 (サンティアゴ・ルシニョールに) Musica eterna (a en Santiago Rusiñol)	ダニエル・ロッチ・ブルナ Daniel Roig Pruna	p.4
第6号 3月16日	《芸術を引いて》 Tirant l'art	ゴゼー Gosé	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentencies, dialectes y altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.2
	「四匹の猫」 (カプリッチョ) Els IV gats (capritxo)	エウジェニ・オルス Eugeni Ors	p.2
	「静かなる喧騒」 Sorolls de quietut	サンティアゴ・ルシニョール Santiago Rusiñol	p.3
		ラモン・ピチョット Ramón Pichot	挿絵1点/p.3
	「屋根の上の夜」 La nit a la teulada	フランシスコ・バラリ・イ・ガリ Francisco Balari y Galí	p.3
	「サラ・バレス」 Saló Parés	P. de X.	p.4
	「二匹の猫」(寓話) Els dos gats (Faula)	クンラト・ロウラ Conrat Roure	p.4
	「全ては白百合だった!」 Tot eren lliris blancs!	ジュゼップ・M・ルビラルタ Joseph M. Roviralta	p.4
	「[シジャス・カタルーニャ主義協会]の結成」 Inauguració de la 《Agrupació Catalanista de Sitges》	R・レベントス R. Reventós	p.4
第7号 3月23日		カルロス・バスケス Carlos Vázquez	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「バルセロナからアルメリアへ、そして再び家に」 De Barcelona á Almeria y altra vegada á casa	R. C. R.	p.2
	「心の奥底に」 Intima	R・スリニャク・サンティアス R. Suriñach Senties	p.2
	「[カタルーニャ合唱団]によるコンサート」 Concert per l' "Orfeó Catalá"	A. C.	pp.2-3
	「四匹の猫」 Als quatre gats	J・セッラ・クンスタンソ J. Serra Constançó	p.3
	「ラ・カイシャ・ノバ」 La caixa nova	マネル・ルカモラ Manel Rocamora	pp.3-4
	「サラ・バレス」 Saló Parés	P. del X.	p.4
	「頭髪」 La cabellera	R・レベントス R. Reventgs	p.4
第8号 3月30日	《バルセロナのはずれ》 Arrabal de Barcelona	リカルド・オピッソ Ricard Opisso	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「心のため息」 (ールムル・サリエラス) Sospirs del cor (—Romul Salieres)	ジュゼップ・アラダーン Joseph Aladern	p.2
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentencies, dialectes y altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.2
	「はかなさ」 Instantánea	ジャスシント・カベリャ Jascinto Capella	p.3
	「猫の怒り声」 Marramaus	マルティ・ルブルトス Martí Revoltós	p.3
	「ピレネー山脈より」 Del Pirineu		pp.3-4
	(未刊行作品の抜粋)「悪徳と美德」 (Fragment d'una obra inédita) El vici y la virtut		p.4
	「サンブラヴィグアス」 Semprevives	オールドマン Oldman	p.4

号数発行月日	タイトル	作者/寄稿者	頁	
第9号 4月6日 (臨時増刊号)	《曇りの》 Nuvulosa	ゴゼー Gosé	表紙絵/p.1	
	「曇りの」 Nuvulosa	F・プジュラ・イ・バリェス F. Pujulá y Vallés	p.2	
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentencies, dialects y altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.2	
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ペラ・ロメウ Pere Romeu	p.3	
		J・ミル J. Mir	挿絵1点/p.3	
		R・スリニャク・サンティアス R. Suriñach Senties	p.3	
	「心の奥底に」 Intimas	ジュアン・M・グアスク Joan M. Guasch	p.3	
	「雄猫と雌猫」(猫の恋愛詩) Gat y gata (idili feli)	フランシスコ・リエナス Francisco Llenas	p.4	
	第10号 4月13日		ラモン・カザス Ramon Casas	表紙絵/p.1
	第10号 4月13日	「テーブルについて」 Sobre la taula	ペラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
「寓話」 Fables		アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.2	
「マニア」(模倣) Manias (imitació)			p.2	
「メニュー」 Menu		ジャスシント・カベリャ Jascinto Capella	p.3	
「青春の」 Primaveral		J・ヌベリャス・ダ・ムリンス J. Novellas de Molins	p.3	
「哀れな黒髪」 Misèria mate		サンティアゴ・ルシニョール Santiago Rusiñol	pp.3-4	
		R・ピチョット R. Pichot	挿絵1点/p.3	
「洪水」 L'Inundació		R・レベントス R. Reventós	p.4	
「詩に関する考察」 Pensaments en vers		アルベルト・ダ・S・リャナス Albert de S. Llanas	p.4	
第11号 4月20日		《帰還》 De retorn		表紙絵/p.1
第11号 4月20日	《帰還》 De retorn	P・プジュラ・イ・バリェス P. Pujulá y Vallés	p.2	
	「別れ」 Adeu	ジュアン・リシュバン (アンペイウ・ジャネー、J・アラダーン訳) Johan Richepin (traducció de Pompeyo Gener y J. Aladerrn)	p.2	
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ペラ・ロメウ Pere Romeu	p.3	
	「恋人たち」(抜粋) Amors (fragment)	アンリク・ダ・フエンタス Enrich de Fuentes	p.3	
	「サンブラヴィグアス」 Semprevives	オールドマン Oldman	p.3	
	「贖罪」 Expiació	マリアン・ロッチ Marián Roig	pp.3-4	
	「感謝」 Mercés	エウジェニ・オルス Eugeni Ors	p.4	
	第12号 5月4日		ガルシア・アスカッレー García Escarré	表紙絵/p.1
第12号 5月4日	「ある・・・女」 Una... Dona	P・クロン P. Colom	p.2	
	「イザベルの新しい歌」 Canso nova de la Isabel	F. P. B.	p.2	
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ペラ・ロメウ Pere Romeu	p.3	
			挿絵1点/p.3	
	「風景」(親愛なる画家J・ミルに) Paisatge (Al volgut amic pintor J. Mir)	ウルテンシ・グエイ Hortensi Guell	p.3	
	「心の奥底に」 Intima	ジャスシント・カベリャ Jascinto Capella	p.3	
	「贖罪」(続く) Expiació (continuació)	マリアン・ロッチ Marián Roig	pp.3-4	
	「努力」 Afanys	フランシスコ・バラリ・ガリ Francisco Balari Gali	p.4	

号数発行月日	タイトル	作者/寄稿者	頁
第13号 5月11日		A・ダ・リケー A. de Riquer	表紙絵/p.1
	「候補者」 Un pretendent	J・B・マルティ・イ・ナバルラ J. B. Martí y Navarrese	p.2
	「散文詩」 Poemets en prosa	カルラス・カザジェマス Carles Casagemas	p.2
	「ブルジョワ詩人のちっぽけな理想を粉々にして」 De la trencadissa dels petits ideals d'un poeta burgès	R・レベントス R. Reventós	p.2
	「サラ・パレス」 Saló Parés	P. de X.	p.2
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.3
		A・ダ・リケー A. de Riquer	p.3
			挿絵4点/p.3
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentències, dialectes i altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.3
	「花の宴」 Jocs florals	P・プンタ P. Punta	pp.3-4
	「報復」(絵画) Revenja (pintura)	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.4
	「四匹の猫でのコンクール」 Certamen dels Quatre Gats		p.4
	「重要事項」 Nota important		p.4
第14号 5月18日		アベリ・トゥレン Eveli Torent	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「奴隷たち」 Els esclaus	E・グァニャベンス E. Guanyabéns	p.2
	「船縁」 Bords	F・プジュラ・イ・バリャス F. Pujulá i Valles	p.2
		J・カタリネウ J. Catarineu	pp.2-3
	「『カタルーニャ合唱団』のマリョルカ遠征」 Excursió a Mallorca de l' "Orfeo Català"		p.3
	「サラ・パレス」 Saló Parés	P. de X.	p.3
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentències, dialectes y altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.3
	「贖罪」(続く) Expiació (continuació)	マリアン・ロッチ Marià Roig	pp.3-4
	「四匹の猫でのコンクール」 Certamen dels Quatre Gats		p.4
	「重要事項」 Nota important		p.4
第15号 5月25日		オランダの画家E・ムルダー pintor holandès E. Muider	表紙絵/p.1
	「テーブルについて」 Sobre la taula	ベラ・ロメウ Pere Romeu	p.2
	「ことわざ、格言、会話そして別の些細なこと」 Ditxos, sentències, dialectes y altres frioleres	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.2
	「墮天使」 Els àngels caiguts	J・B・マルティ・イ・ナバルラ J. B. Martí y Navarre	p.2
	「平原を通過して」 Pel camp	P・アラルブ P. Alálp	p.2
	「『四匹の猫』のサラ・グラン」 (トゥレン展) Sala gran dels "Quatre Gats" (exposició torent)	P. de X.	p.2
	「寓話」 Fables	アルフォンス・バジェス Alphons Pajés	p.3
	「贖罪」(完) Expiació (acabament)	マリアン・ロッチ Marià Roig	pp.3-4
	「四匹の猫でのコンクール」 Certamen dels Quatre Gats		p.4
	「重要事項」 Nota important		p.4

- ・ (?) を付した箇所は筆者の加筆である。
- ・ 下線部分は原文のままである。
- ・ タイトルおよび作者/寄稿者が無表記のところはそのまま空欄とした。